

「たどくらぶ」多読ブックトークオンライン開催報告

Online booktalk event at Digital Hollywood University

遠藤 樹子 ENDO Shigeko

デジタルハリウッド大学 講師
Digital Hollywood University, Lecturer

デジタルハリウッド大学メディアライブラリーでは、2018年度から日英語多読図書の拡充を図ってきた。さらに、2019年度からは、メディアライブラリー内で学内向けの課外多読クラブ「たどくらぶ」や学外が多読実践者も参加できる数々の多読関連イベントを開催することで、学内外の多読実践者に交流の場を提供してきた。しかし、2020年度からは、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染拡大にともない、これらのイベントをメディアライブラリーで開催することが難しくなった。そこで、学内外の多読実践者の多読への意欲を維持すべく、2020年11月から2021年5月まで3回にわたって、「たどくらぶ」特別企画として、学内外の多読実践者の参加を募り、ブックトークをするイベントをオンラインで開催した。本稿では、この「多読ブックトーク」について報告する。

キーワード：多読、ブックトーク、メディアライブラリー、オンライン、イベント

1. はじめに

酒井邦秀 (2002)^[1] がやさしい本から順にたくさん読む多読方法を提唱して以来、多読は急速に広がりを見せている。それにとともに、多読図書を備える公共図書館、学校図書館も増えてきた。また、図書を備えるだけでなく、多読実践者同士が読書相談や読んだ本の紹介ができる「交流の場」を設ける図書館も増えつつある。デジタルハリウッド大学メディアライブラリーでも、所蔵する英語多読図書約2000冊以上、日本語多読図書約500冊以上の活用を目的に、学内向け課外多読クラブ「たどくらぶ」を定期開催し、学外が多読実践者向けにも、酒井邦秀氏を講師に迎えての「多読講演会」や多読図書を自由に手に取れる「多読カフェ」などのイベントを開催することで、多読実践者に交流の場を提供してきた。筆者は、これまで「NPO多言語多読」会員の立場から、本学メディアライブラリーの多読図書の選書やこれらのイベント開催にかかわってきたが、コロナ禍において、メディアライブラリー内に人々が集い、直接図書を手に取ることが難しい状況となり、学内外の多読実践者の多読継続への意欲低下が危惧される事態となった。そこで、このような状況下においても、学内外の多読実践者が交流できる場を提供し、多読への意欲維持につなげたいという意図で、2020年11月から3回にわたって「多読ブックトーク」をオンライン開催してきた。

本稿では本イベント概要、開催に至るまでの準備、当日の様子を参加者のアンケート回答の一部を交えて紹介するとともに、本イベント開催の結果と考察、今後の課題について述べる。

2. 多読ブックトーク

2.1 イベント概要

イベント内容は、多読実践者がオンラインで集まり、約2時間にわたって、各自読了した日英語図書についてブックトーク、すなわち本の紹介を行うというシンプルな構成で行った。それに加え、第2回からは、会の途中で本学「たどくらぶ」参加学生が、多読の成果として制作した英語多読動画を参加者に共有する時間も設けた。

参加者数は、全員がブックトークする時間を確保するため、20名限定としたが、観覧のみの参加も可能とした。そのため、第1、2回は、ブックトーク希望者と観覧希望者の内訳が当日まで把握できないまま開催することとなったが、実際には、「多読について知りたい」「こ

れから多読を始めてみたい」という動機で、観覧のみを希望する参加者が相当数を占めており、それ以降もこの傾向が続くことが予測された。そこで、第3回からは、申し込み時に参加目的を記入してもらうことで、参加者数の制限を緩やかなものにしていった。

2.2 開催準備

本イベントは、オンライン会議ツールZoomを用いて行った。主な開催前の準備としては、イベント告知、参加者募集があった。第1回開催時は学内向けには学内ポータルサイト「デジキャン」のみ、学外に向けては、メディアライブラリーのFacebookとTwitterで告知を行うとともに、多読関連イベントの実績がある公共図書館へフライヤーを送付した。第2回開催時からは、前述の告知方法に加え、学内向けにはSlackでも告知を行った。また、第1～3回まで、「NPO多言語多読」サイトの「ニュース一覧」ページ^[2]に告知の掲載を依頼した。さらに、これらのインターネットツールを用いた告知だけでなく、「NPO多言語多読」主催の集まり等で、本イベントへの参加を学外が多読実践者に直接呼びかけた。

2.3 イベントの様子

第1～3回のブックトークの参加者数等の数値を表1に示す。

表1：「多読ブックトークオンライン」参加者等数値

	開催年月日	申込者	参加者	学内参加者
1	2020.11.14.	22名	18名	3名
2	2021.2.20.	17名	14名	3名
3	2021.5.15.	35名	25名	15名

申込者数、参加者数ともに回によってバラつきがあるが、特筆すべきは、第1、2回には3名と少なかった学内からの参加者が、第3回には15名と大幅に増加していることである。「学内からの参加者」とは、デジタルハリウッド大学、大学院、デジタルハリウッドスクールに所属する学生、教職員を指している。学外参加者の中には、日本国内のみならず海外からの参加もあった。

第2回から実施したアンケートの回収率は、第2回92%、第3

回48%であった。第3回の回収率の低さは、参加者に学内の留学生が多かったことが原因であると推測される。

以下に、参加者アンケートの自由回答欄に記入された感想の一部を抜粋して紹介する。

- ・いろいろなジャンル、レベルの本の紹介や、多読の仕方など、内容が盛り沢山でとても聞き応えがありました。早速読んでみたいと思います。
- ・読みたい本ができた!次も参加したい!
- ・楽しかったです。どの本も面白そうで、欲しい物リストにたくさん入れました。
- ・楽しかったです。共有することで、また読もうかな、という気持ちになりました。オンラインの場合、海外から参加できるのもいいですね。
- ・とても和やかな雰囲気の中で皆さんが読んでいらっしゃる本についてお聞きできて、とても刺激を受けました。
- ・読んでみたくなるような本の紹介にワクワクしました。学生さんの動画もとても楽しく拝見させていただきました。次回の開催がもうすでに待ち遠しいです。
- ・最後に、学生さんの作品の完成度の高さに驚きました!多読の先に、作品作りがあるというのは、理想的な形ですね。
- ・人によって好きなジャンルが異なっていたので、いろんな本を知る良い機会になりました。今すぐは難しいですが、自分にとって多読を始める良いキッカケになりました。

これらの感想から、本イベントによって、参加者が多読への意欲を高めたことが窺える。また、本学学生が制作した動画も高い評価を得ていたことがわかる。

当日紹介された本の情報は、イベント開催時にZoomのチャット機能を用いて参加者に共有したが、次回参加への動機づけとするため、整理した情報を後日メールでも参加者に送付した。

3. 結果と考察

3.1 多読への意欲維持・向上

学外から参加者を募ったことで、学内で定期開催している多読クラブ「たどくらぶ」では得ることができない多様なジャンル、レベルの多読図書についての情報交換がなされた。これが学内外の実践者への刺激となり、コロナ禍における多読への意欲維持・向上につながっていくことが大いに期待される。

3.2 多読普及への貢献

企画の段階では、本イベントが多読実践者の交流の場となることを想定していたが、実際には半数近くの参加者が観覧希望であった。このことから、実践してはいないものの、多読に関心がある潜在層が学内外に一定数存在することが明らかになった。このような潜在層にとって、本イベントは実際に実践者の話を聞き、多読への理解を深められる有意義な機会となったであろう。本イベントを通じて、一般に多読がより認知されるようになれば、学内の多読への関心も高まっていくものと思われる。

また、これまで多読実践者が集う交流の場は、首都圏、または、多読が盛んな一部地域に偏りがちであった。そのため、それ以外の地域の実践者は、他の実践者と交流する機会が少なく、多読継続のモチベーションを維持しにくい面があった。今回、オンラインで本イベントを開催することで、居住地にかかわらず、実践者が交流できる場を提供したことは、一般への多読普及の一助になると言えるだろう。

3.3 学外参加者を募る意義

学外の参加者を募ることによる本学にとってのメリットも見出された。本イベント内で、本学の多読実践者である学部生が多読の成果として制作した英語多読動画を参加者に共有したところ、高い評

価を受けたのである。学外からの参加者は、本学での学びを深く理解したうえで本イベントに参加したわけではなく、「多読」という言葉の下に集まった人たちであった。また、首都圏だけでなく、日本各地や海外からの参加者も複数含まれていた。そのような多様な背景を持つ参加者に、本学の学生ならではの多読の成果物を共有することで、本学の特色を周知させられたことは、意義があると思われる。

4. 課題

本イベントは、学内外の多読実践者の交流を目的としたものであるため、学内外からバランスよく参加者を集める必要があった。そのため、イベントの実態に合わせて、毎回告知方法の改善を図ってきた。その結果、学内向けの告知方法としては、Slackの有効性が認められた。本学内で、コロナ禍以降、本格的に利用されるようになったSlackは、イベント告知のツールとして、すっかり浸透していると言えるだろう。一方で、学外の多読実践者のなかには、SNS等を日常的に利用していない人たちも少なくないことから、学外参加者に向けての本イベントの告知方法としては、「口コミ」が無視できない有効な手段であることが明らかになった。これまで開催回によって申込者数に波があったことを今後の課題とし、今後は、安定的に参加者を集められるように、告知方法や開催時期などに、さらに改善を加えていく必要があるだろう。

また、これまでの開催では、英語多読実践者による英語図書についてのブックトークが中心となっていたが、今後は本学に多数在籍する留学生にも参加を促し、留学生が日本語図書について発表できる場としても活用していきたいと考えている。そのためにも、学内の多読に関心を持つ層に向けて、メディアライブラリーの多読図書の活用と「たどくらぶ」への積極的な参加を呼びかけていきたい。

5. まとめ

本イベントの開催は、企画当初の目的「学内外の多読実践者の多読への意欲維持・向上」につながったばかりでなく、学内外への多読普及に貢献し、これまで交流の場に参加する機会が少なかった地域の実践者にとっても、貴重な交流の場を提供した。また、学外に向けて、本学の学びの特色を伝える機会になり得ることも示したと言えよう。

酒井・西澤(2014)は、「2002年以来、多読の普及を支えてきたのは、(1)多読三原則、(2)たくさんの本、(3)仲間、という三本柱でした。図書館は3つの柱のうち2本を支える大事な場です」^[3]と述べている。本学メディアライブラリーは、既に多くの多読図書を備え、それらを学外にも共有する機会を設けることで、学内外の多読普及の三本柱の一つを支えてきたと言える。さらに、今後は、強い発信力を持つ本学の特色を生かし、都心にある大学のメディアライブラリーとして、図書館に求められるもう一つの機能「仲間」作りも支えるべく、学内外の多読実践者の交流の拠点の一つとなることが期待されるだろう。

コロナ収束後には、対面での多読実践者の「交流の場」の再開を目指しつつ、オンラインイベントも継続開催し、学内外の多読実践者の交流をさらに活発にしていきたいと考えている。

参考文献

- [1]酒井邦秀:『快読100万語!ペーパーバックへの道』ちくま学芸文庫(2002年)。
- [2]NPO多言語多読:「ニュース一覧」
<https://tadoku.org/newslst> (参照2021年7月30日)。
- [3]酒井邦秀、西澤一編著:『図書館多読への招待』(JLA図書館実践シリーズ25)日本図書館協会(2014年)、14頁。